

# 論文の書き方についての注意

懸賞論文審査委員会

論文は既存の研究（文献）と異なるオリジナリティのある知見を論理的・実証的に展開し、明晰に論じて得た言説です。論文は読者に読んでもらうためのものであって、自分の覚え書きではありません。著者の主張を正確に伝えるには、長い伝統の中で確立してきた論文執筆の作法を踏まえて執筆することが肝要です。以下では論文執筆にあたり、特に注意すべき要点を述べておきます。

## 1. 問題設定・先行研究

論文の冒頭部分で問題設定を明確に行い、先行研究を参照してください。

- (1) 論文である以上、通常スタイルとしては、その冒頭部分（序、はじめに、第一章、序論、プロローグ等）に、なぜこういう問題意識をもったのか、その理由あるいは自分の動機を書くことが望ましいです。
- (2) 論文全体がその問いに支えられ、全篇を通して、一貫性のある論理展開がなされ論述されるべきです。問題設定が不明確なままでは、何を主張したいのかが読者に正確に伝わりません。
- (3) 関連する先行研究を十分に調べることは論文執筆の基本です。既存研究で何がどこまでわかっており、あなたはこの研究の中で何をどこまで明らかにするのか。文献サーベイを通して、先行研究を踏まえた課題設定が重要です。

## 2. 末尾

論文の末尾部分（結論、結び、終わりに、終章、まとめ、エピローグ等）において、冒頭の「問題」に対応する「まとめ」を書くべきです。「序」と「結論」とは、呼吸が合っていなければなりません。

## 3. 調査

調査に基づく論文は、量的調査、質的調査にかかわらず以下の項目を明記してください。

- (1) 個人で実施した調査か、ゼミ等で実施した調査に参加したものか。
- (2) 調査の実施年月日、場所、対象者数、回収率、方法（面接法、郵送法等）。
- (3) 質問紙調査であれば調査票、半構造化面接調査であれば質問項目など、内容が理解できる資料を必ず添えること。

## 4. 研究者としての責任ある行動

学術研究を行う者には研究者としての社会的倫理に基づいた責任ある行動が求められます。特に、調査・インタビュー等などでご協力をいただいた方の個人情報、企業情報などの扱いやプライバシーの保護には十分に配慮する必要があります。

（「法政大学研究倫理規程」を参照

[https://www.hosei.ac.jp/application/files/3815/7492/5822/kenkyuriri\\_kitei.pdf](https://www.hosei.ac.jp/application/files/3815/7492/5822/kenkyuriri_kitei.pdf)

## 5. 剽窃

自分の言葉と他者の言葉は明確に区別して執筆します。先行研究での到達点を示すことは論文を書く上での基本ですが、“コピー”（コピー&ペーストの略語）、切り貼りだけでは筆者のオリジナルな意見とは見なされないどころか、剽窃と判断され不正行為と見なされます。

したがって、長い引用で、直接引用する場合は2、3文字分、行頭から下げその箇所が引用であることを示し、引用文献を明記します。

## 6. 目次・注・文献リスト

目次、注および文献のリストを丁寧につけてください。

(1) 注は番号をふり、章末あるいは全体の末尾にまとめて記入するか、ページ毎に脚注として記入してください。なお引用注については、必ず引用箇所のページ数まで入れてください。

(2) 文献は、注とは別に、全体の末尾に文献リストを添えてください。

著者名、編者名、翻訳者名、書名あるいは論文名、掲載誌名、発行年、出版社名等を、明記してください。特にインターネット上の資料を掲載する場合には出典がはっきりしない場合があるので、URL およびアクセス年月日も付記してください（ただしインターネット上にある資料でも、書籍や雑誌、報告書など印刷媒体がある場合は、印刷媒体を優先してください）。

## 7. 論文の要旨の書き方

課題設定、分析方法、論旨の展開、そして得られた結論などを600字程度（40字×15行程度）を目安として、簡潔にまとめてください。査読者に自分の論文の意義をアピールするためには極めて重要です。

## 8. 執筆にあたって

早めに準備に着手し、書き直しをしてください。

(1) 一般に、一回の書き下ろしで良い完成稿をつくることは極めて困難です。第一次草稿→第二次草稿→（以下省略）→完成稿というように幾度も書き直して、できるだけ推敲を重ねると良いです。

(2) そのためには、早め早めに準備に着手し、書き直しをする時間的余裕を作るように工夫してください。時間切れのため、後半部分が展開不足となり惜しまれる論文がかなり多いです。

論文を書く準備として、常日頃から「読書ノート（あるいはカード）」と「自分の考え・発想を記すノート（あるいはカード）」という二系列のノートを蓄積しておくのが良いです。知識と発想の組織的蓄積なしには、良い論文を書くことはできません。

## 9. 論文の書き方推薦図書

論文の書き方について解説している本は多数ありますが、2000年以降に出版された代表的な書籍を以下に示します。なお、本学図書館のHPの「法政大学蔵書検索システム（OPAC）」や「パスファインダー（テーマ別探し方ガイド）」などを利用すると良いです。

時事教育研究会編著（2000年）『論文・レポートの書き方と作文技法』画文堂

白井利明・高橋一郎（2013年）『よくわかる卒論の書き方』[第2版]（やわらかアカデミズム＜わかる＞シリーズ）ミネルヴァ書房

田中共子編（2009年）『よくわかる学びの技法 [第2版]』（やわらかアカデミズム＜わかる＞シリーズ）ミネルヴァ書房

戸田山和久著（2012年）『新版 論文の教室—レポートから卒論まで』NHK ブックス 1194

河野哲也著（2002年）『レポート・論文の書き方入門』慶応義塾大学出版会

石黒圭著（2012年）『論文・レポートの基本—この1冊できちんと書ける！』日本実業出版社

小笠原喜康著（2009年）『新版 大学生のためのレポート・論文術』講談社現代新書

斎藤 孝、西岡達裕著（2005年）『学術論文の技法 新訂版』日本エディタースクール出版

酒井 聡樹著（2015年）『これから論文を書く若者のために 究極の大改訂版』共立出版

櫻井 雅夫著（2003年）『レポート・論文の書き方上級 改訂版』慶応義塾大学出版会

高木 隆司著（2003年）『理科系の論文作法』丸善

井下千以子著（2013年）『思考を鍛えるレポート・論文作成法』慶応義塾大学出版会

佐藤望編著、湯川武、横山千晶、近藤明彦著（2012年）『アカデミック・スキルズ：大学生のための知的技法入門 第二版』

以上